

会員研究

徳川氏へ鞍替えした 秀吉股肱の武将・堀尾吉晴

竹村 紘 一

天文十二年（一五四三）～慶長十六年（一六一一）

安土桃山時代・江戸時代初期の武将・大名。豊臣三中老の一人。初代松江藩主。尾張国北四郡守護代伊勢守系の織田信安に仕えた堀尾泰晴の嫡男。通称は茂助。官位：従四位下、帯刀先生。

出自

高階氏は天武天皇の皇子高市親王の子・長屋王の後裔にあたる。高階業遠から十二代目の邦経が尾張国丹羽郡供御所村を領していたと伝えられ、早くから尾張に根を下ろしていたようだ。五代後の忠泰が斯波義重に仕えて勲功があり、はじめて堀尾氏を称したという。代々、守護斯波氏、守護代織田氏などの被官であったが、吉晴の時、長浜時代の秀吉に仕えることになったのである。なお、高柳光寿・松平年一氏の『戦国人名辞典』で

は、吉晴の父を泰時としている。秀吉に仕える

尾張国丹羽郡御供所村（愛知県丹羽郡大口町豊田）の土豪の家に生まれた。父は岩倉織田氏の重職であり、同じく岩倉織田氏に仕えた山内盛豊（山内一豊の父）とともに連署した文書が残っている。共に家老であったとされるから同役であったのであろう。

この頃、岩倉織田氏自体が傍流の清洲織田氏の被官であった織田信長に圧迫されていた。岩倉織田氏は清洲織田氏と対立していたが、織田信長は主筋の清洲織田氏を倒して、岩倉織田氏と直接対決するに至っていたのである。

吉晴は十六歳の時、永禄二年（一五五九）の岩倉城の戦いで初陣したが、この戦いで岩倉織田氏は滅亡、吉晴は浪人となった。その後、獵師暮らしをしていたが美濃国の

山中で木下秀吉（後の豊臣秀吉）に出会い、その家臣になったとの話があるが、義経が鷲尾経春を家臣にした話と酷似しており創作の可能性が大である。

その後、秀吉に従って各地を転戦、天正元年（一五七三）の時点ですでに百五十石を与えられていることから、かなり子飼いに近い存在であったと思われるのである。因みに山内一豊は、刀根坂の戦いで功名によりこの時期に近江唐国で四百石を与えられ出世の先陣を切っている。

天正十年（一五八二）の備中高松城攻めでは敵将であった清水宗治の検死役に任命され晴れがましい舞台での主役を務めた。太閤記の名場面である。同六月の山崎の戦いでは天王山争奪の際に敵將を討ち取る殊功により六千二百石を増された。

豊臣秀次の宿老となる

天正十三年（一五八五）には田中吉政・中村一氏・山内一豊・柳直末らとともに豊臣秀次付きの宿老に任命され、近江国佐和山（滋賀県彦根市周辺）で四万石を与えられる。

九州征伐にも従軍し、その後、

従五位帯刀先生に任ぜられた。天正十八年（一五九〇）、小田原の役では山中城攻めに加わり戦功を挙げた。しかし、この役の途中でともに出陣した嫡子・金助（従兄弟ともいう）が戦傷死している。

これらの戦功を賞されて、秀吉から遠江国浜松に十二万石を与えられた。順調なる出世であった。平素は穏和な人柄で人望があり、「仏の茂助」と称されたが戦場では戦巧者の猛者であった。興味深い逸話がある。天正十八年（一五九〇）の小田原征伐の時の話である。秀次に従い参戦していた吉晴は山中城を攻めた時、絶好の地に陣を張った。しかし、それを見た同僚の中村一氏が秀次に頼み込んでその場所に替えて貰ったのである。結果、一氏は山中城一番乗りの手柄を挙げた。これに吉晴は憤慨、秀次の前に出ると、勝手に陣場を替えられた憤懣を遠慮なく言い立て、その場にいた者たちが宥めるのも聞かずに散々に罵り、刺し違える構えさえ見せたという。温厚でも戦場での功名争いや理由なき偏頗な扱いには激情を露にしたのである。その頃の武将の気性が偲ばれる話ではある。

三中老に任命される

秀吉の晩年には、中村一氏や生駒親正らと共に中老に任命され、豊臣政権に参与したとされる。三中老は、豊臣政権末期に制定されたとされる役職。小年寄あるいは小宿老とも呼ばれる。政事に参与し、五大老と五奉行との意見が合わないときの仲裁役であった。生駒親正（讃岐高松十七万石）、堀尾吉晴（遠江浜松十二万石）、中村一氏（駿河府中十四万石）の三人が任命されたとされるがその存在については疑問も多い。

三中老については『太閤記』などの史料には出ているが実際に設置され機能したかは不明である。小瀬甫庵『太閤記』と山鹿素行『武家事紀』などに記述があるが、それらの記述には同時代史料の裏付けがない。『徳川実紀』にも三中老の記述はあるが、慶長四年（一五九九年）一月、前田利家・石田三成らが徳川家康と対立したときの三人の行動については、「奉行方の詰問使を務めたが家康に恫喝されて引きあげた」ものの、「細川忠興に説かれて両派の和解に尽力し、後に忠興と吉晴は家康から加増に与った」としている。

会津征伐の直前、慶長五年（一六〇〇年）五月七日付で、吉晴・親正・二氏と、前田玄以・増田長盛・長束正家の三奉行が連署し、井伊直政に宛てて「会津征伐延期を勧告する書状」（実質は家康に対する諫止状）を発しており、これは三中老が実在し機能していたことを示す同時代史料とされるが、この古文書は写しであり原本は確認されていない。

秀吉没後は家康に接近する
秀吉の死後、家康に接近し、家康が太閤の遺命に違背し諸大名と婚姻を進めたのを生駒親正、中村一氏、僧西笑承兌と共に詰問に行くと、老獪な家康の巧みな対応により要領を得なかった。三中老の追及が甘かったとも思われる始末であった。また、大坂の前田と伏見の徳川があわや決戦かという時に、中老として両者の間を奔走して大事に至らしめなかった。これにより、家康は窮地を脱し、家康より堀尾の家を終生粗略に扱わぬという誓書まで出させたとされる。

慶長五年（一六〇〇）二月には、浜松とは別に、家康の計らいにより越前国府で五万石の加増を得た。この頃には徳川寄りになっていた

と思われる。武功一筋の忠義者とされていたが、なかなか世渡り上手でもあったようである。

同年六月、浜松から越前への帰途、吉晴は三成と懇意の美濃国加賀井城主加賀井重望なる大名と出会い、加賀井の甘言に乗せられて、彼を刈屋城主・水野忠重（家康の叔父）に会わせた。そして三人で三河国池鯉鮒において宴会中、加賀井重望が突如として水野忠重を殺害したため、驚愕した吉晴が重望を討った。重望は西軍に通じていたとされる。

しかし、重望と吉晴が同心で主人を殺害したと誤解した忠重の家臣によつて吉晴は十七ヶ所の刀傷を負いながらも虎口を脱した。流石に勇者であったが、重傷により九月の関ヶ原本戦には参加出来なかった。

やがて、実情は家康の知るところとなり、重望を討った功績や息子の忠氏が本戦に参加して武功を挙げたことを賞されて、戦後に家康から出雲富田二十三万五千石に加増移封されたのである。

慶長九年（一六〇四）、跡を継いでいた期待の忠氏が早世すると、家督は孫の堀尾忠晴（忠氏と前田

玄の娘の間に生まれた）が継ぐこととなったが、忠晴は未だ六歳という幼年だったため、吉晴の長女と娘婿である筆頭家老の堀尾河内守との間に生まれた掃部（吉晴の孫との間で御家騒動が起きる。慶長十二年のことであった。騒動は吉晴の活躍により河内守らは隠岐へ流されて自決して収まったが、堀尾家の将来に不安を感じさせるものであった。

順風満帆に過ぎるかと思えた吉晴の人生であったが、晩年は不遇であったのである。慶長十六年六月、失意の内に死去、六十九歳であった。堀尾家は忠晴に嗣子なく断絶となった。同僚であった中村一氏の家も二代目の一忠の代に家中の乱れにより改易された。嘗ての同僚の山内一豊の家のみは幕末まで続くのである。

